



学業指導の充実に向けて

—学業指導を全ての教職員が進めるために—



平成24年3月
栃木県教育委員会

目 次

はじめに

1. 資料の活用にあたって ————— P. 1
(1)作成の目的 (2)資料の内容 (3)活用上の留意事項 (4)資料の活用例
2. 学業指導のイメージ図 ————— P. 2
3. 学業指導とは ————— P. 3
 - ・学びに向かう集団づくり ・子どもが意欲的に取り組む授業づくり
 - ・相互の関連 ・実態にあった対応の必要性
4. 学業指導実践のための視点とポイント及び実践例
《学びに向かう集団づくり》 ————— P. 7
 - 【視点】 帰属意識の高い学級づくり ————— P. 8
 - コラム ～ほめること～ ————— P. 11
 - 【視点】 規範意識の高い学級づくり ————— P. 12
 - コラム ～道徳教育と規範意識～ ————— P. 14
 - 【視点】 互いに高め合える学級づくり ————— P. 16《子どもが意欲的に取り組む授業づくり》 ————— P. 21
 - 【視点】 自信をもたせる授業づくり ————— P. 22
 - 【視点】 コミュニケーション能力を育む授業づくり ————— P. 26
 - 【視点】 一人一人の実態に配慮した授業づくり ————— P. 30
5. 参考資料 ————— P. 34
 - ・リーフレット「あなたは、学業指導を知っていますか！」
(平成21年1月)
6. 平成23年度児童・生徒指導推進委員会委員 ————— P. 36
7. これまでの主な指導資料 ————— P. 37
8. 参考文献 ————— P. 37

はじめに

現在、学校における児童・生徒指導上の諸問題は、基本的な生活習慣に関わる日常的な問題から暴力行為、いじめ、不登校といった問題行動等に至るまで多岐にわたり、依然として憂慮すべき状況が見受けられます。

それらの要因・背景は、児童生徒の生活様式や社会全体の学校に対する意識の変化、家庭や地域の教育力の低下等様々であり、学校だけでなく、保護者や地域社会、関係機関等と綿密な連携の下、適切に対応していく必要があります。

とりわけ学校においては、問題行動等への対処のみならず、未然防止の観点からの指導に加え、児童生徒の将来の社会的自立に向けた教育が求められています。

本来、児童・生徒指導は、一人一人の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動であり、今般策定された「とちぎ教育振興ビジョン（三期計画）」の中でも、中核的な理念として位置付けられているものであります。

その具体策として、本県においては、“集団の中で学ぶ”という学校教育の特質を生かして、一人一人を成長させるという視点に立ち、それぞれの学級を「学びに向かう集団」に高めながら、児童生徒が自らの力で様々な不適応を解消し意欲的に学習活動に取り組めるよう指導・援助していく「学業指導」を推進しているところであります。

本書は、平成21年1月に発行したリーフレット「あなたは学業指導を知っていますか！」をもとに、学業指導をイメージ化し、わかりやすく解説するとともに、集団づくり・授業づくりの視点や実践例、取り組む際の留意点等を掲載しました。

本資料を積極的に活用し、一人一人の教職員が「学業指導」の充実を図ることにより、児童生徒が夢や希望をもち、日々学校に行くことが楽しくなるような取組が、各学校においてより一層推進されますようお願いいたします。

最後に、本資料の作成にあたり、河村茂雄委員長をはじめ、各推進委員の方々に御尽力いただきましたことを心から感謝申し上げます。

平成24年3月

栃木県教育委員会教育長 須藤 稔

1. 資料の活用に当たって

(1) 作成の目的

各学校において、それぞれの学級を「学びに向かう集団」に高めながら、児童生徒一人一人が自らの力で様々な不適応を解消し、意欲的に学習活動に取り組めるよう指導・援助する際の視点を示すことにより、学業指導の充実を図り、開発的・予防的な児童・生徒指導の推進を目指す。

(2) 資料の内容

最初に学業指導のイメージ図を掲載した。次に、学業指導の2本の柱である「集団づくり」と「授業づくり」及びその相互の関連について記した。さらに、「集団づくり」「授業づくり」それぞれについて3つの視点とその視点についてのポイントを示すとともに、それらの実践例を紹介し、具体的な説明を加えた。

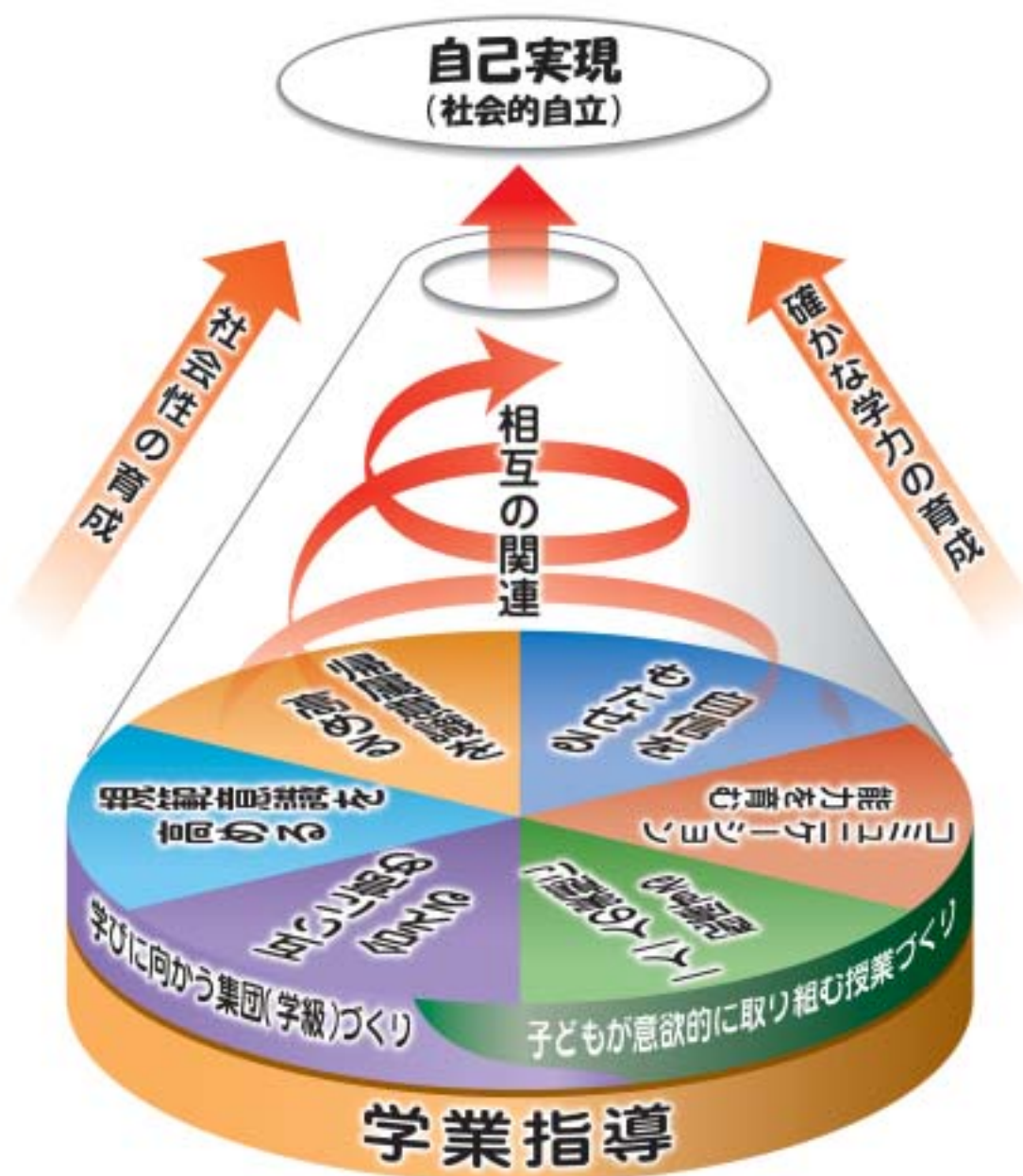
(3) 活用上の留意事項

- 本資料に示した実践例は、多くの学校で同様の取組がすでに実施されているものと考えますが、それらの取組を本資料を参考に学業指導として、改めて、意図的・計画的に整理し見直すなど、各教育計画に適切に位置付け、学校全体で推進するよう努めることが大切である。
- 各実践例は、複数のポイントが相互に関連した構成となっていることに留意するとともに、実施に当たっては、ねらいを明確にして取り組むことが重要である。
- 指導の際には、それぞれの学級(ホームルーム)の実態や児童生徒の発達の段階を踏まえて、活用できるものを選択したり、アレンジしたりしながら具体的な取組を工夫することが求められる。

(4) 資料の活用例

- 教師個々の指導力向上に役立てるための参考資料とする。
- 児童・生徒指導に関する資料及び学校の諸計画を作成する際の参考資料とする。
- 学級(ホームルーム)経営や学習指導改善のための参考資料とする。
- 校内授業研究会などで、教員研修充実のための参考資料とする。

2. 学業指導のイメージ図



*このイメージ図は、「学びに向かう集団(学級)づくり」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」が、相互に関連を図りながら、将来の自己実現を目指していくことを表しています。

3. 学業指導とは

学業指導とは、それぞれの学級を「学びに向かう集団」に高めながら、児童生徒一人一人が自らの力で様々な不適応を解消し社会性を身に付けたり、意欲的に学習活動に取り組んで学力を向上させたりして自己実現（社会的自立）を図っていくための指導・援助のことです。

これは、「集団の中で学ぶ」という学校教育の特質を生かして、児童生徒一人一人を成長させるという考え方に立つものです。左のイメージ図に示したとおり、学業指導を推進するには、「学びに向かう集団づくり」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」の両側面から取り組み、相互の関連を図ることが大切です。

学びに向かう集団づくり

教職員のだれもが経験しているように、集団の状況は教育実践の成果を左右します。また、一人一人の成長も、どのような集団に属しているかに大きく影響を受けます。そこで、児童生徒一人一人の資質の向上のためには、個への指導・援助とともに、教職員による集団育成のための具体的な働きかけが必要となります。

学びに向かう集団づくりの視点として、「帰属意識の高い学級」「規範意識の高い学級」「互いに高め合える学級」の3つの視点があります。これらの学級像は、以下の通りです。

①【視点】 帰属意識の高い学級とは

一人一人が学級に所属感や連帯感を感じる居心地のよい学級です。

このような学級では

児童生徒は自らが集団の一員であることに誇りをもち、集団に役立っていたり、必要とされていたりすることに喜びを感じています。また、人間関係は良好で関わり合いが活発に行われ、互いに認め合い仲間として協力し合って生活しています。

②【視点】 規範意識の高い学級とは

集団生活や対人関係におけるルールが児童生徒に共有され、
当たり前のこととして定着している学級です。

このような学級では

児童生徒はルールの意義を理解し、自主的に遵守しながら、規律ある集団生活をしています。不適切な言動が減り、集団内の人間関係が良好になります。

③【視点】 互いに高め合える学級とは

児童生徒に建設的な相互作用がある学級です。

このような学級では

児童生徒はそれぞれの個性や能力を発揮しながら生活し、互いをモデルにしたり切磋琢磨したりして意欲的に諸活動に取り組んでいます。また、学級内の生活や活動に自治が確立していて、集団としてもより高い目標達成に向けて一人一人が主体的に貢献しています。

子どもが意欲的に取り組む授業づくり

確かな学力の育成は、学校教育の重要な目標であり、児童生徒の自己実現（社会的自立）に欠かせないものです。教師には、一人一人の児童生徒にとって「わかる授業」の確立を目指した日々の授業の改善が求められます。また、授業を通して、教科のねらいの達成を図るためには、児童生徒一人一人が学習活動に自主的かつ意欲的に取り組めるように指導・援助する必要があります。

子どもが意欲的に取り組む授業づくりの視点として、「自信をもたせる授業」「コミュニケーション能力を育む授業」「一人一人の実態に配慮した授業」の3つの視点があります。これらの授業像は以下の通りです。

①【視点】 自信をもたせる授業とは

「できた」「分かった」という喜びや達成感が味わえる授業です。

このような授業では

一人一人が活躍できる場が設定されており、よいところを認めたり、ほめたり、励ましたりする教師の意図的な働きかけがあります。発達の段階に応じて、選択の場面を設定し自己決定させ、成功体験を積み重ねます。また、教える内容を効果的に習得させるために教材・題材の開発と作成、発問や指示の構成などの指導方法の継続的な工夫・改善を続けています。

②【視点】 コミュニケーション能力を育む授業とは

協同で学ぶ「学び合い」がある授業です。

このような授業では

学び合いの中で、児童生徒たちは自分の思いや考えを分かりやすく相手に伝えようとするとともに、相手の思いや考えを理解し尊重しようとしています。その繰り返しの中で、コミュニケーション能力が育まれます。授業の中にペア学習やグループ学習など、全ての児童生徒が話したり聞いたりする場があります。

③【視点】 一人一人の実態に配慮した授業とは

児童生徒の様々な能力や適性、特性に応じて、
学習上の不適応状態を予防する手立てが実践されている授業です。

このような授業では

一人一人の能力や適性、特性、意欲の状態等の現状を把握し、個に応じた支援策に基づき支援します。その際、教職員間で連携し、組織的な指導・支援体制を整えます。

相互の関連

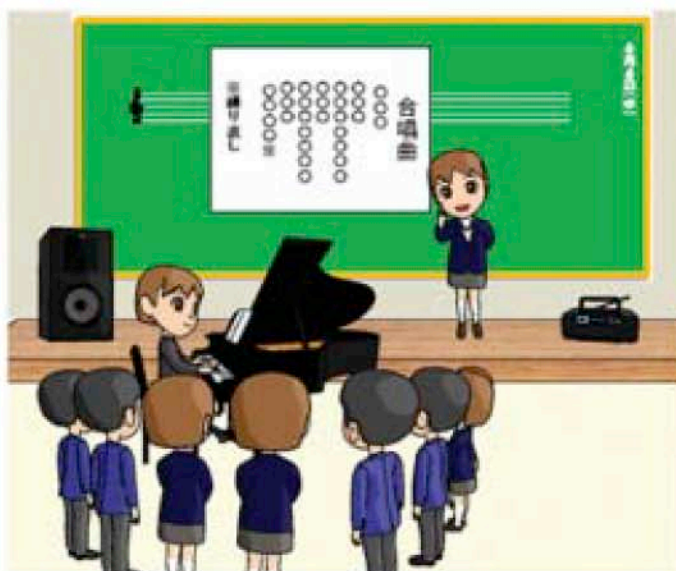
ここまで述べたように、帰属意識や規範意識が高く互いに高め合える望ましい学級集団では、児童生徒一人一人の自発的な活動意欲が高まるので学習活動にもプラスの影響を与えます。その意味で「学びに向かう集団」なのです。

しかし、望ましい学級集団ができあがってから授業が行われるものではありません。日々の授業も含めた学級における活動を通して徐々に学級集団はつくられます。つまり、授業における学習活動も学びに向かう集団づくりの場、集団づくりの過程になるということです。児童生徒にとって、授業は一日の中で最も長い時間を共有するだけに、そこで展開される学習活動の有り様が集団づくりに大きく影響を及ぼします。教職員はその影響を意識する必要があります。

学級集団の雰囲気や学習活動と密接に関連するという教員の意識は、学級担任制をとる小学校においては、比較的強いと思われませんが、教科担任制をとる中学校や高校においても、このことを意識して、授業を構成し展開することが求められます。つまり、学級集団の状況を把握し、学級集団を育成する方向で教科のねらいを達成するための学習活動を展開するということが重要であり、そのためには、学級担任と教科担任との連携が不可欠です。

ここでいう「集団づくり」は、個への配慮を欠いた集団指導を意味するものではありません。一人一人の児童生徒理解に基づいて、一人一人がもつ個性（よさや違い）を集団の中で生かし合い伸ばし合うことによって、集団を育成し発展させることを意味しています。

イメージ図（P2）にもあるとおり、日々の教育活動の中で「学びに向かう集団づくり」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」の相互作用によって、将来の自己実現（社会的自立）に向けた社会性及び確かな学力の育成が図られるのです。



実態にあった対応の必要性

集団づくり、授業づくりを進めるに当たっては、学級（ホームルーム）集団内の多様な個性や様々な人間関係などを見据えながら行うことが求められます。つまり、個と集団の実態把握が不可欠です。それぞれ違った児童生徒の性格、能力、適性、興味・関心、家庭環境、将来の進路希望などをよく理解し、学校生活や学習への適応の様子等、個の実態を把握します。同時に、その適応の度合いや意欲、学力等の学級内のばらつきを整理し、集団の実態を把握します。また、児童生徒の人間関係の様子を把握することも集団の実態把握には必要です。

実態に合う対応について、座席を例に考えてみます。誰もが親和的な関係にある人間関係の良好な学級（ホームルーム）集団であれば、座席をくじ引きで決めても問題なく、前後左右の者同士で協力し合って学習にも生活にも取り組めるでしょう。しかし、固定化した人間関係、階層化した関係、排他的あるいは攻撃的な関係がある集団では、座席についての配慮が必要になります。教師が、配慮を要する児童生徒を中心に意図的に座席を決めて、対人不安の少ない環境の中で活動させ、良好な人間関係を徐々に育て、学級（ホームルーム）集団を改善します。

また、授業においても、集団内の学習意欲がどのような状態にあるのか、能力差はどうかなどの実態に応じて授業の課題レベルや発問、説明等の授業展開を変化させます。同じ内容の授業であっても学級（ホームルーム）集団が異なれば、異なる実態があるので展開は変わるようになります。

このように、その実態に応じて、集団づくりや授業づくりの視点、視点についてのポイントの優先順位を決め、対応策を計画し、実践しながら児童生徒と集団の成長や変化を把握することにより、対応策を修正していくが必要になってきます。



4. 学業指導実践のための 視点とポイント及び実践例

《学びに向かう集団づくり》

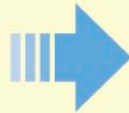


【視点】 帰属意識の高い学級づくり

ポイント

I. 認め合いの場の設定

- ①所属感の醸成
- ②自由で温かな雰囲気

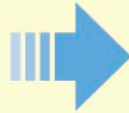


一人一人のよさや違いを尊重し合う雰囲気の中、自分は「このクラスの一員として認められている、クラスのために役に立っている」という意識や自信をもたせることが大切です。

級友との関わりを楽しむ活動や一人一人に役割がある活動を工夫しましょう。

II. 協力し合える場の設定

- ①連帯感の醸成
- ②主体的な活動の場

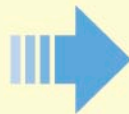


「一人はみんなのために、みんなは一人のために」の言葉に代表されるように、クラス全員が団結して一つのことに取り組み、協力することの素晴らしさを味わえるような体験をさせることが大切です。

そのために、児童生徒が主体的に取り組めるような場や機会を工夫しましょう。

III. 居心地のよい環境づくり

- ①安心して生活できる環境
- ②教室環境の整備



児童生徒が落ち着いて生活し、諸活動に意欲的に取り組むことができる環境を整えましょう。

そのために、教師と児童生徒、児童生徒同士の安心感・信頼感に支えられた良好な人間関係や、きれいに整えられ温かみのある教室環境づくりに努めましょう。

IV. 感動体験の共有

- ①目標の共有化
- ②日常生活の充実
- ③学校行事等の充実



休み時間等の日常生活や学校行事等を活用し、目標に向かってみんなで努力することや、みんなでひとつのことをやり遂げるような感動体験をさせることで、自分たちの学級に愛着や誇りがもてるようにしていきましょう。

朝の会の充実〈小・中〉

◎健康観察での呼名を大切にしています。

一人一人の名前を呼ぶことは、児童生徒の所属感を高めることにつながります。

また、みんなの名前が呼ばれることでお互いにクラスの一員であることを確認し合えます。



【例】朝の会

- ① あいさつ
- ② 健康観察（呼名）
- ③ 今日の予定
- ④ 係からの連絡

名前を呼びながら、元気に登校できているか、体調だけでなく、表情も注意して見るようにしています。そして、気になる児童生徒には朝の会終了後に個別に声をかけるようにしています。

また、朝の会は、1日の始まりに気持ちのよいスタートを切るための時間です。呼名を大切にすること以外にも、笑顔で児童生徒を迎えることや明るくさわやかなあいさつを交わすことを心がけています。

清掃の役割分担〈小・中・高〉

◎公平・平等を大切に清掃の役割分担を工夫しています。



仕事の役割分担を公平・平等にすることで集団の階層化を防ぐことになります。

また、役割分担を明確にしたり、協力して取り組ませたりすることは、連帯感の育成にもつながります。

児童生徒同士の力関係で清掃の分担が決められることがないよう、輪番制にしたり、分担表を貼ったりして、仕事の責任の所在を明確にします。

また、みんなが気持ちよく落ち着いて生活するためにも、清掃は大切な活動だと意識させるようにしています。

掲示物の工夫〈小・中・高〉

◎児童生徒がつくる掲示物コーナーを設置しています。

【例】大成功の文化祭

クラスが一つになった瞬間！

○組
最高



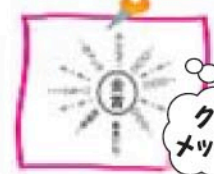
素晴らしい
ハーモニー



緊張



クラス
メッセージ



児童生徒が自分たちの教室環境をよりよいものにしたいという思いや発想を生かしています。

また、活動の足跡（写真や感想等）を掲示することにより自分の教室への愛着心や居がい感をもたせることにもつながります。

この他にも、掲示物については次のようなことに気を付けています。

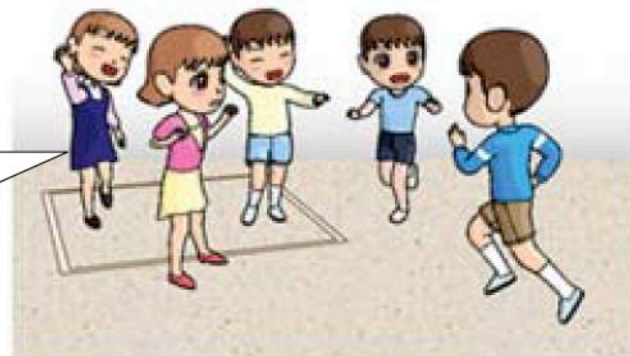
- 明るく温かみがあり、落ち着いた雰囲気になるようにする。
- 掲示物の刷新を心がけ、タイムリーな掲示内容にする。
- 児童生徒の作品を掲示するときは、担任からのひとことを添えるようにする。
- 掲示する際は、真っすぐ、きれいに貼るようにする。

グループ活動の充実〈小〉

◎リーダーを交代しながら、毎週1回、班遊びの内容について話し合いをさせています。

リーダーとしての行動の仕方とメンバーの協力の仕方、この両方がそろうことがグループ活動成立の条件です。

学級ではどちらの立場になってもその役目を果たせるよう、具体的な行動の仕方をしっかり身に付けさせる必要があります。



【リーダーの役割のポイント】

- 自分勝手な振る舞いをがまんして、みんなのことを考える。
- 命令するのではなく、みんなの意見を聞く。
- 決め方について話し合い、みんなの意見をまとめる。

【メンバーの役割のポイント】

- 自分の意見を出す。 ○反対するときはその理由と代替りのアイデアを出す。
- 決まったことに文句を言わない。 ○自分の役割をきちんと果たす。

学習合宿の取組〈高〉

◎高校1年生の夏期休業中に、2泊3日で学習合宿を実施しています。

スケジュール〔例〕

(1日目)	(2日目)	(3日目)
開校式・オリエンテーション	校歌練習	卒業生の話
校長講話	講義Ⅳ	講義Ⅷ
講義Ⅰ	講義Ⅴ	講義Ⅸ
講義Ⅱ	講義Ⅵ	講義Ⅹ
講義Ⅲ	自学自習	自学自習
自学自習	講義Ⅶ	アンケートの実施
学び合いの時間	学び合いの時間	閉校式
レクリエーション		

進路希望実現のために自ら進んで課題に取り組む態度を養い、自分の学習スタイルを見つけることができます。

また、分からない問題があれば、クラスみんなで知恵を出し合ったり考えたり、教え合ったりする中で、勉強にも仲間の存在が不可欠であることを認識させます。

【学習合宿を実施する際のポイント】

- ①集団で学習することで学習意欲を高め、切磋琢磨する気持ちを培う。
- ②講義と自学自習を繰り返し、くじけそうになったときなどに、友人や教師からの励ましが力になることを体験させる。
- ③合宿中には、学習に加え、クラス対抗のドッジボール大会やオリエンテーリング等のメニューを組み込み、集団の中で協力する態度も育てる。
- ④大学生になった先輩などから、具体的アドバイス（勉強方法や受験心得等）を直接聞く機会を設けることで、自分の将来への意識の向上を図る。

コラム ～ほめること～

一人一人が満足し、親和的な学級(ホームルーム)集団では

個人のおよさや頑張りや教師がみんなの前で賞賛すると、級友からも賞賛されることが期待でき有用感がより高まります。級友もその行動をモデルにするなど、望ましい行動が集団にも定着します。

所属感を感じていない児童生徒が多く人間関係がばらばらな学級では

「点数稼ぎ…」などと、教師に賞賛された児童生徒が逆に攻撃されかねません。このような実態であれば教師は他の教職員とも連携し、個別に賞賛を繰り返し、一人一人の有用感を高める取組をします。



【視点】規範意識の高い学級づくり

ポイント

I. 指導の基盤

- ①ルールの整備・明確化
- ②指導事項の共通理解
- ③計画的・継続的指導
- ④家庭との連携



児童生徒にとって安全・安心な環境をつくることは、集団の規範意識が醸成されることにつながっていきます。

「学校は社会のルールを学ぶ場である」という共通理解のもと、全教職員が指導内容を明確に把握し、毅然とした指導を行いましょ。

II. ルールの意義の理解

- ①体験を通しての理解
- ②授業を通しての理解



「個の育成」と「集団の育成」という観点で、学校生活全体を通して、ルールの意義について随時指導していきましょう。

特に、学校行事や体験活動等の特別活動や道徳教育との関連を図りながら意図的、計画的に指導していきましょう。

III. ルールの内在化

- ①ルールの必要性を理解させる場の設定
- ②自らルールをつくり守らせる場の設定
- ③ルールの社会的意義（法律を含む）の理解

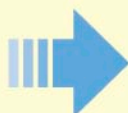


児童生徒が自らルールをつくる場を設定し遵守させることで、主体的な態度を育てていきましょう。

また、社会の一員として、個人の自由と責任、権利と義務についての自覚を深めるよう、発達の段階に応じて指導していきましょう。

IV. ルールの定着

- ①生活のきまり
- ②学習のきまり



発達の段階に応じて、ルールの定着を目指し指導していくことで、規範意識の高いクラスに育てていきましょう。

また、継続した習慣形成を図るために、「〇〇小生活の約束」「〇〇中 学習ルール」等として、生活や学習のルールをマニュアル化することで効果を上げている学校も多く見られます。

集会活動〈小〉

◎規範意識の向上を図るため、日課を工夫して、充実した集会活動を行っています。
また、児童指導部が企画し児童会に運営させることで、児童の主体性を育てています。

平成 23 年度

日 課 表

〇〇市立 A 小学校

通常日課	月	火	水	木	金
8:15	読 書	チャレンジタイム (打合せ)	全校集会① 音楽集会② さわやか集会③ グリーンタイム④	ステップアップタイム (打合せ)	ふれあいタイム 学級裁量①③④ 児童集会②
8:30		さわやかチェック	朝 の 会		

さわやか集会実施計画

A 小学校児童指導部

1 目的

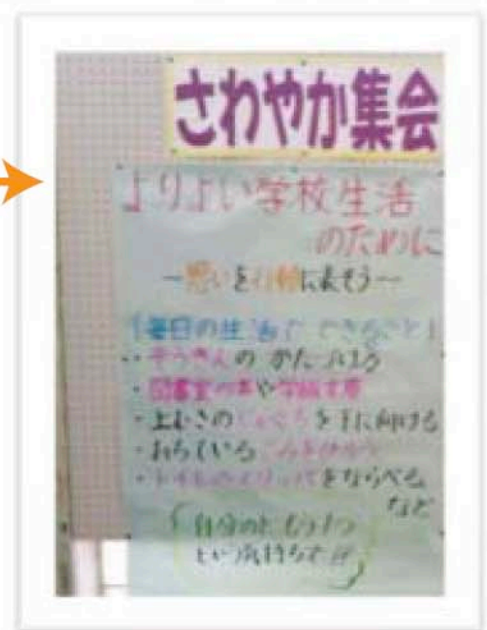
児童がよりよい人間関係を築き、居心地の良い学校生活を送るためには、集団生活で守るべきマナーを身につけなければならない。しかし、生活経験の乏しい児童や対人関係が苦手な児童も少なくない。そこで、本校児童の実態を踏まえ、全校児童に共通したテーマで集会を企画実践し、児童の規範意識の向上を図る。

～中略～

5 年間計画

回	月/日(曜)	テーマ	主な内容
1	4/20(水)	自分の生活を見直そう(1)	1122末に行った児童の意識調査の結果から意識を促す
2	5/18(水)	児童指導集会	児童の実態に合った指導を行う
3	6/15(水)	できていますか「あいさつ・ことばづかい」(1)	意識が薄れると低下しがちな「あいさつ・言葉遣い」の意識向上
4	9/21(水)	児童指導集会(さわやか表彰)	実践力の賞賛と意識向上を図る
5	10/19(水)	自分の生活を見直そう(2)	意識改善しようと考えたことが実際にはどうか確認させる
6	11/16(水)	できていますか「あいさつ・ことばづかい」(2)	「あいさつ・言葉遣い」が身につけているか再確認する
7	1/18(水)	児童指導集会(さわやか表彰)	実践力の賞賛と意識向上を図る
8	2/15(水)	6年生から下級生へ	最上級生として意識した経験や気持ちを下級生に伝達する

【児童会で作った掲示】



低学年での学習規律や生活習慣の徹底を重視していますが、同時に児童の自主性を育むため、さわやか集会を実施しています。集会をするようになって、子どもたちの表情がずっと明るくなり、学校全体に活気がみなぎっています。地域の方々からも「A小の子はあいさつがいいですね。」とほめられることが多くなりました。自信にもなり、児童が率先してよいことをしていこうという気持ちが育っていると感じています。

ルールづくり〈中〉

◎生徒が自分たちでルールをつくり、協力して実行させることで、規範意識の高揚を図っています。



「生活のきまり」がありますが、中には与えられたきまりという感覚があるせいか、徹底できないことも少なくありませんでした。

そこで、クラスでKJ法を使って意見を集約する活動を取り入れたところ「自分の分だけやって、廊下で遊んでいられると腹が立つ」や「給食当番の分を忘れられると悲しい」や「当番がマスクをしていないと衛生的に嫌だ」等の意見が出ました。

そこで、「当番の服装について」や「当番の分は最初にやる」等のルールを生徒が作りました。自分たちの作ったルールなので、守ろうという意識は高いです。次は清掃について考えさせていこうと計画しています。

コラム ～道徳教育と規範意識～

規範意識を高めるためには、「道徳教育」を学校の教育活動全体に関連付けて行くことが大切です。また、「道徳の時間」では、主に「道徳の内容の小学校4(1)、中学校4(1)(2)」で取り扱います。授業をするに当たっては、資料等の登場人物の気持ちや生き方などについて考えたり、友人と話し合ったりしながら自分の考えや思いを深め、規範の内面化を図ることが大切です。



ホームルーム活動〈高〉

◎集団生活上必要な課題についての話し合いを行い、規範意識を高めています。

栃木県総合教育センター作成のシートをもとに、クラスの実態に合わせた項目を設けて、学期に1回、集団生活を送る上でのクラスや学年全体の課題について話し合わせています。その中から、課題の解決に向けたクラスの決め事や、学年全体で取り組むべき事柄を明らかにすることで、個人や集団の規範意識を高めるようにしています。

年 組 番 名前 ()

学校生活のルールやマナーについて考える

- (1) 毎日の学校生活をふりかえって、下の表のそれぞれの項目をチェックしましょう。
① あなたはできていますか。 ② みんなはできていますか。

(チェックのしかた) 当てはまるものの数字をかく。〔回答時間：10分〕
4 できている 3 どちらかというとできている
2 どちらかというとできていない 1 できていない

No.	項目	① あなたはできていますか	② みんなはできていますか
1	チャイムの合図や時間を守る。		
2	朝、友達や先生に会ったらあいさつをする。(下校時も)		
3	先生や友達の話をしっかり聞く。		
4	人の話に割り込んで話し始めない。		
5	授業や集会のとき、勝手にまわりの友達とおしゃべりしない。		
6	困っている友達がいたら見て見ぬふりをしない。		
7	取り組む前からおもしろくないという態度をとらない。		
8	友達を仲間はずれにしない。		
9	なにげない人のうわさ話から、悪口にならないようにする。		
10	授業に必要な物を持ち込まない。		
11	ごみを散らかさない、ごみが落ちていたら拾う。		
12	おしゃべりをせず進んで掃除をする。		
13	靴やスリッパを脱いだらそろえる。		
14	物をこわしたり、落着きをしたりしない。		
15	お金の管理をきちんとする。		
※自分の学校・学級で、特に大切なまきを書く。			

→ 〈回収〉 → 〈集計〉 → 〈結果報告〉

- (2) 学校や学級のルール、マナーについて、みんなで話題にしたほうがよいと思うことをグループで話し合って提案しよう。(三つ以内)

1番	
2番	
3番	

- (3) 全体で話題にするテーマを一つに決めます。また、次のどちらの方法で解決したらよいか決めます。

ルール・マナーを確認する 守れるように工夫する

子どもたちの規範意識を育てるための ルール・マナー教材集 【中・高編】



— 子どもの規範意識を育てるための —
ルール・マナー教材集
【中・高編】
— 子どもの規範意識を育てるための —
ルール・マナー教材集
【中・高編】
— 子どもの規範意識を育てるための —
ルール・マナー教材集
【中・高編】
— 子どもの規範意識を育てるための —
ルール・マナー教材集
【中・高編】

平成20年3月
栃木県教育委員会発行

【H20.3 栃木県教育委員会発行】

本校では、インターンシップをはじめ、キャリア教育の視点に立った体験的な学習活動を行わせています。生徒たちには、ホームルーム活動等を通してこれらの体験から得た様々な気づきを振り返らせたり、周囲の意見を聞かせたりするよう心がけています。

これらの活動の積み重ねにより、生徒一人一人に社会人として求められる規範意識や倫理観が培われるとともに、集団としての意識の底上げにつながると信じて、地道な取組を続けています。

〔参考〕

「インターンシップ事前・事後アンケート」

○インターンシップに参加して学んだことは何ですか。(10項目中上位4項目)

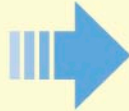
働くことの厳しさ	17.7%
あいさつ・言葉づかいの大切さ	17.0%
働くことの大切さ	13.9%
人間関係の重要性	13.1%

【視点】互いに高め合える学級づくり

ポイント

I. 目標の共有

- ①目的意識の明確化
- ②願いの共有

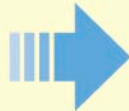


担任の思いや児童生徒の願いを反映させた学級目標を設定しましょう。

その際、個々の願いが埋もれたり、疎外感が生まれたりすることのないよう配慮していきましょう。

II. 自治の確立

- ①話し合い活動の充実
- ②主体的活動の工夫



話し合い活動では、児童生徒の当事者意識の高揚を図りましょう。

与えられた係活動や当番活動であっても、児童生徒が自分なりの意味付けを行ったり自分なりの工夫を加えたりするよう配慮しましょう。

III. 個性の発揮

- ①自他のよさの認識
- ②活躍の場の確保

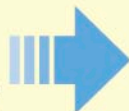


構成的グループエンカウンター等を活用した相互のよさを認め合う活動を通して、学級（ホームルーム）における自己の存在の大きさを意識させましょう。

それぞれの得意分野を生かせるような場を意図的に設定し、互いに賞賛し合える集団の雰囲気をつくるようにしましょう。

IV. 活動の活性化

- ①活動の場と内容の充実
- ②個々の願いの実現に向けて



児童生徒の個性の伸長や夢の実現を目指した、より具体的な活動場面を設定しましょう。

それぞれの活動を通して、達成感や自己有用感を味わわせるようにし、活動意欲の高揚を図りましょう。

学級目標〈小・中〉

◎学級目標を作成する際、クラス全員が参加できるようにしています。



全員参加で作成した学級目標であることを意識させ、適宜、目標に照らして、自分たちの行動を振り返らせませす。

【作成の手順】

- ①学級についての担任自らの思いを伝える。
- ②学級目標を各自宿題で考えてくる。
- ③KJ法により班ごとに話し合う。
- ④全体で話し合う。
(話し合いを進める中で、知・徳・体を意識したものに集約していく。)

当番活動の充実〈小・中〉

◎毎月1回、当番活動の反省会をしています。

当番	名前 _____
私の役割	今月の活動を振り返って
来月の目標	

当番活動への取組状況を振り返ることは、子どもたちの役割への意識を高めるとともに、責任感を育てることにつながります。
結果として、自分たちの力で学級を運営しているという意識をもたせることができます。

【反省会実施のためのポイント】

- マナーリ化を防ぐために、自己反省をもとに異なる当番を担った友だちとの相互評価を行わせる。
その際、プラス面での見取りを伝え合わせるように助言する。
- 活動内容の質の向上を目指し、工夫・改善点について互いにアイデアを出し合わせる。
- 自分の当番以外の役割に対する関心を高め、集団へ寄与する態度を育成するために、日頃から友だちの当番活動の様子を意識して見ることを習慣化させる。

帰りの会〈小・中〉

◎毎日の帰りの会を利用して、友だちのよい行動の発表会を実施しています。

友だち同士で相互に承認し合う活動は、個々の承認欲求の充足につながり、学級の居心地感の高揚にも大きな効果が期待できます。

同時に、互いにモデルにし合うことで、個々の行動がレベルアップし、学級全体に望ましい行動が広がります。



【形骸化を防ぐポイント】

よい行動を探す視点を固定せず、その日によって変えていくことで、帰りの会の形骸化を防ぎます。

- 自分がしてもらってうれしかったこと。
 - 誰かが誰かにしていたよいこと。
 - 誰かがみんなのためにしていたよいこと。
 - 誰かの頑張り。
- ※いずれも事実と自分の感想を発表させる。

【教師の関わりのポイント】

- 賞賛された児童生徒に対して、教師から温かな言葉を添えるだけでなく、よいところを探せた発表者へも言葉を添える。
- 賞賛されにくい児童生徒については、生活の中で教師が周囲に対し、さりげなく伝えて気付かせ、全ての児童生徒が賞賛されるよう配慮する。
- 発表者が偏ったり多かたりする場合は、列ごとに曜日を割り振って発表させる。
- 担任や他の教職員からの発表も時折加える。
- 児童生徒たちの関係性が育っていないときは、1ヶ月程度教師が生徒たちのよさや頑張り伝える活動をまず行う。このとき、シール等を使って可視化する。

体育祭〈中・高〉

◎体育祭では、生徒が主体的に取り組めるよう生徒の意見を生かしています。



学級（ホームルーム）での話し合いの結果（意見、アイデア等）を、体育祭の全体計画に反映させています。このことにより、生徒の自治意識が高まり、学校行事に対する主体性が育ちます。

また、一人一人に役割を与えることで、自己有用感や責任感を高め、実施後の賞賛を与えることで、高いレベルの達成感を味わわせるようにしています。

【生徒の手による体育祭を実施するためのポイント】

○体育祭の計画立案に当たっては、各学級（ホームルーム）での話し合いの結果を生徒会で検討し、生徒会担当が職員会議で提案し、生徒の考えを生かすようにする。自らの手で作り上げた行事であることを強く意識させることで、主体性の育成と達成感を味わわせ、その後の学校生活に生かせるよう支援していく。

○体育祭参加に当たってのクラスの目標を明確にした上で、出場種目や練習計画、係分担等を生徒の話し合いを重視しながら決定していく。生徒が種目や係の軽重を感じたり、勝負に過度にこだわりすぎたりしないよう配慮する。



学校祭〈高〉

◎学校祭では、準備段階から、意図的に意見を発表させたり、意見がぶつかり合う場面を設定したりして、表現力やクラスへの適応力を高めるための工夫を行っています。

高校での学校祭は、保護者や地域住民、更には中学生等にも学校のよさを伝える重要な機会になっています。

そのためにも、右の【活動カード】を使って、「事前準備」「活動実践」「事後評価」までを意識した計画的な取組を心がけています。

【活動カード】

()年()組()番 氏名 _____

[]班

○班の仕事・目標

○班内の自分の係

[準備に際しての自分の活動]

[協力する仲間の名前]

・

・

・

・

・

・

[当日の自分の活動]

[協力する仲間の名前]

・

・

・

・

・

・

[事後の反省]

〈新たな人間関係ができたか〉

〈お互いに協力できたか〉 etc

○なぜ：

○どうすればよかったのか：

[その他]

【年間行事に位置付けた学校祭を実施するためのポイント】

- ①活動の目標を明確にする。
- ②準備段階から諸活動のねらいを明確にする。
- ③事後評価を行う。
- ④目標の達成を目指すため、他の教育活動との関連を図る。
- ⑤年間を見通した指導計画を作成する。



4. 学業指導実践のための 視点とポイント及び実践例

《子どもが意欲的に取り組む授業づくり》



【視点】自信をもたせる授業づくり

ポイント

I. 活躍できる場の設定

- ①発表の場の工夫
- ②役割の設定

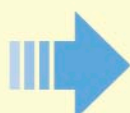


発言の取り上げ方を工夫し、一人一人の意見を集団に生かしましょう。

また、小集団による学習の中で役割をもたせるなど、児童生徒一人一人が活躍できる場を意図的に設定し、一人一人を生かした創意工夫ある授業を展開しましょう。

II. 自己選択・決定

- ①主体的な学び
- ②授業のしかけ



児童生徒一人一人が主体的に学ぶことができるよう課題の設定や学び方について、自ら選択したり決定したりできる場を工夫しましょう。

III. 成功体験の場の設定

- ①意欲の喚起・持続
- ②チャレンジする学習



授業の導入を工夫したり、葛藤場面を盛り込んだりして、児童生徒の関心・意欲を引き出し、持続させましょう。

また、多少難解な課題に挑戦させるなど、最後までじっくりと取り組ませ、児童生徒に成功体験を積みませましょう。

IV. 満足感・達成感

- ①「できた」「分かった」喜び
- ②教師の賞賛
- ③子ども同士の認め合い



児童生徒に「できた」「分かった」という喜びを味わわせる授業を展開し、取組の過程や結果を具体的にほめたり、励ましたりしましょう。

また、児童生徒同士が互いのよさを学び合う場を設けるなどして、満足感・達成感を味わわせましょう。

発言の取り上げ方(つぶやきを大切に使う)〈小・中・高〉

◎児童生徒の発言が偏らないように、意図的に指名したりつぶやきを大切にしたりしています。

つぶやきを大切に、取り上げたり、紹介したりし、授業で生かし、活躍させることで、自信をもたせています。

いい疑問だね。みんなにも聞いてみようか？

〇〇って何か？



発言を取り上げる際には、「全員を参加させる」ことを意識しています。

【発言の取り上げ方：例】

- 意図的指名（事前にノートをチェックし、考えを把握した上で）
 - ・「〇〇さんと同じ（違う）意見のようだけどどうかな？」
 - ・「△△さんの考えをみんなに聞かせてくれないかな。」
- つぶやきを大切に使う。

【児童生徒の変容】

- 授業の中で存在感をもちます。
- 多様な考えをもちます。
- 主体的に参加します。

教師からの賞賛〈小・中・高〉

◎「小さいことから」「具体的に」「多様な方法で」の3点を心がけて、児童生徒をほめるようにしています。

【ほめるときに心がけていること】

- ①小さいことから
 - ・「字がとても上手だね。」
 - ・「(前よりも)できるようになったね。」
- ②具体的に
 - ・「～について詳しく書けているね。」
 - ・「～という表現がいいね。」
- ③多様な方法で
 - ・授業後のノートや作品に賞賛・励ましのコメントを記入する。
 - ・休み時間等に、「さっきの時間は～だったね。」と声をかける。
 - ・間接的にほめる。担任の先生に話し、「〇〇先生がほめていたよ。」と伝えてもらう。

授業の中で、児童生徒のよいところを見つけて承認や賞賛、励ましを行います。そのことが、意欲や自信につながります。

上記以外にも、次のことに気をつけて賞賛を行っています。

- 一人一人の児童生徒に応じた声かけをするようにしています。
- 学習結果ばかりでなく、その答えに至るまでの考え方や過程、努力にも視点を当てています。
- 活動中にも賞賛を行い、学習意欲の持続につながっています。
- ほめるタイミングやほめ方（シール等の活用）を工夫しています。

自己評価・相互評価の活用〈小・中〉

◎自己評価・相互評価を学習活動に取り入れ、認め合う活動を行うようにしています。

〔例〕 相互評価（評価シート）

よいところ さがし

組 番 ()

※今日の授業を振り返ろう。

◎それぞれの人の良いところを2つみつけ、○をつけよう。	自分自身	グループの人へ				グループから			
		さん	さん	さん	さん	さん	さん	さん	さん
1 積極的									
2 考えがすどい									
3 まとめ方が上手									
4 説明が上手									
5 ていねいな話し方									
6 聞き上手									
7 アイデアマン									
8 ねばり強く取り組む									

評価によって、振り返りの場を設けることで、自己存在感を与えます。また、相互評価を通して、周囲から認められることによって自信につながります。

○の数を全員同じにすることで、できる子、できない子の差を生むことを防ぎます。

相互評価は「評価シート」を活用する場面以外でも行うようにしています。

- 「今の意見はどうですか？」と学級全体に問いかけます。
- 「隣同士でお互いに確かめてみましょう。」とペアで確認させます。
- 「うなずき」、「拍手」等を行います。
- 美術で制作した作品を鑑賞し合い、コメントを書き添えます。
- 作文やレポートを読み合い、よいところを見つけます。

学びのよさ、活動のよさを共感的に理解させることが大切です。また、お互いのよいところを探し、認め合う活動ができれば、そのこともほめるようにしています。



自己決定〈小・中〉

◎児童生徒自身が、自己決定しやすいように本時の学習の流れを明確に示しています。

学習課題や学習方法等を児童生徒自身に選択させることは、授業への意欲を引き出すことにつながります。



学習そのものに関する内容・意義・方法等を児童生徒が理解できるように説明します。その後、取組に自由度をもたせ、自己決定をさせます。

例えば、学習方法の選択場面では、「表現方法をいくつか考えさせ、選択させる」「検証のための実験方法をいくつか考えさせ、選択させる」等が考えられます。

児童生徒に自己決定させるためには、学習の流れを明確に示すことで、児童生徒に学習内容を理解させ、自分からやりたいという主体的な学びを引き出すことが大切です。

チャレンジ学習〈小・中・高〉

◎多少難解な問題にも、積極的にチャレンジさせています。



児童生徒の「もっと知りたい」という知的な探究心を喚起するような難易度の高い課題を設定します。課題に挑戦し、できた時には達成感や満足感を味わうとともに、より難解な課題にチャレンジしようとする意欲につながります。

また、思い通りにならない体験も時には有効です。その時の体験をもとに再挑戦しようとして、更に努力するようになります。

【視点】コミュニケーション能力を育む授業づくり

ポイント

I. 安心して発言できる雰囲気づくり

- ① ルールの明確化
- ② 受容的態度の育成



「話は黙って最後まで聞く」「友だちの発言を笑ったりばかにしたりしない」等のルールを設け、安心してできる環境をつくりましょう。

人権教育との関連を図りながら、自分と異なる意見や考えであっても、それを尊重する態度を育てましょう。

II. 交流の場の設定

- ① 学び合いのある授業の展開
- ② 合意形成の場の設定



授業の中で話し合う場面を設ける場合には、教師がその必要性を十分に吟味し、目的を明確にした上で、ペア学習やグループ学習など学習形態を工夫しましょう。

学級(ホームルーム)活動の集団討議や問題解決的な学習、共同作業など合意形成が必要な場面を意図的に設定し、目的に応じた話し合いができるようにしましょう。

III. 話し合いの工夫

- ① 話し合いの質を高める工夫
- ② 折り合いをつける話し合いの工夫



話し合いのときに自信をもって発言できるように資料の提示や経験の想起などを通して、自分なりのしっかりとした考えをもたせましょう。

また、内容によっては、友人の考えと自分の考えの共通点と相違点を明らかにして、互いに譲り合いながら建設的な意見を出し合う大切さを実感させましょう。

IV. 振り返りの場の設定

- ① 自己理解・他者理解につながる評価の工夫
- ② よさやおもしろさが実感できる振り返りの工夫



自己評価・他者評価の方法を工夫し、自分や友人の新しい側面に気付くようにしましょう。

振り返りの時間を設け、考えを伝え合うよさや意見を出し合って問題を解決するおもしろさを実感させましょう。

対話のある授業〈小・中・高〉

◎友人同士の関わり合いを大切にしたい、対話のある授業の展開を心掛けています。



友だちの話に真剣に耳を傾けたり考えを述べ合ったりすることは、自分の考えを広げたり深めたりするとともに、コミュニケーション能力の育成につながります。対話のある授業を展開するためには、教師も含めた学級（ホームルーム）の受容的な雰囲気が欠かせません。その際、話し方や聞き方のルールを明確にすると、児童生徒の安心感が増します。

【受容的な雰囲気をつくる教師の態度】

- 児童生徒の発言を、うなずきながら最後までしっかりと聞く。
- ゆったりとしたテンポで、「待つ」ゆとりを確保するようにする。
- 発言の正誤のみにこだわらず、発想や着眼点を賞賛する。
- 教師に都合のよい発言だけを取り上げないように気を付ける。

【話し方・聞き方のルールづくり】

○A小学校では、次のような話し方・聞き方のルールを掲示しています。

- **【聞き方のルール】**
- あ：相手をよく見て
 - い：一生懸命に
 - う：うなずきながら
 - え：笑顔で最後まで
 - お：おしゃべりせずに

- **【話し方のルール】**
- た：正しい姿勢で
 - ち：ちょうどよい声の大きさで
 - つ：伝わるように、はっきりと
 - て：適当な速さで
 - と：友だちに分かるように

○B小学校では、次のように発達の段階に応じた話し合いのルールを設けています。

- **【低学年】**
- 話す**
 - ・大きな声で話す。
 - ・はっきり、さいごまで話す。
 - ・聞く人を見て話す。
 - ・わけをつけて話す。
 - 聞く**
 - ・話す人の目を見て聞く。
 - ・口をとして、さいごまで聞く。
 - ・せすじをのばして聞く。

- **【高学年】**
- 話す**
 - ・場に応じた声の大きさで話す。
 - ・最後まで、はっきり話す。
 - ・伝えたい相手を見て話す。
 - ・理由を付けてくわしく話す。
 - ・相手の意見に関連付けて話す。
 - 聞く**
 - ・話す人の目、表情を見て聞く。
 - ・正しい姿勢で聞く。
 - ・うなずきながら聞く。
 - ・自分の考えと比べながら聞く。

○このほかにも、「友だちの発言を笑ったりばかにしたりしない」等のルールも考えられます。

児童生徒同士をつなぐ教師の役割〈小・中〉

◎児童生徒同士をつなぐ役割を意識して授業を展開しています。

発言を受け止め、教師が児童生徒同士をつなぐ役割を果たすことは、対話や学び合いを深め、主体的な学びを促すことになります。

また、対話や学び合いのある授業は、児童生徒同士のよりよい人間関係づくりや居場所づくりにつながります。



・児童生徒の発言を、「他の児童生徒に」、「全体に」、「教材に」、つなぐ意識をもって授業を展開することが大切です。

【教師がつなぐ役割を果たしている具体的な場面：小学校4年「ごんぎつね」：例】

発問：「ごんはよいきつねですか、悪いきつねですか。理由を付けて話し合みましょう。」



【A子】

ごんはさびしいからいたずらばかりしてるだけで、本当はよいきつねだと思います。

「ごんはさびしいからいたずらしているだけでよいきつねだ」という意見について、B夫さんはどう思いますか？

【他の児童生徒に】



【B夫】

ほくはいたずらして村の人にめいわくをかけているから、悪いきつねだと思います。

ごんについて、よいきつね、悪いきつねの両方の意見が出ましたね。他の人はどちらの意見に賛成ですか。理由を付けて言って下さい。

【全体に】



【C子】

わたしはB夫さんに賛成です。火をつけたり、いもをほりちらかしたりしているので、村の人からは悪いきつねとされていました。

C子さんが「村の人からは悪いきつねとされていた」と言いましたね。ごんが村の人たちにとってどんな存在だったか、教科書から探してみよう。

【教材に】



話し合いの形態の工夫〈小・中〉

◎話し合いの目的によって、ペア、グループ、一斉など学習形態を変えながら授業を行っています。

話し合いの形態にはそれぞれ長所と短所があり、それを理解した上で目的に応じて使い分けます。その際、教師が何のために話し合いを設けるのかを明確にしておく必要があります。



○話し合いの形態の工夫と学級づくり

- ・話し合いには、主に「ペア」、「グループ」、「一斉」の三つの形態があります。

【一般的な話し合いの長所と短所】

形態	長所	短所
ペア	<ul style="list-style-type: none"> ・話すことへの抵抗感が極めて少ない ・短時間で簡単に活動できる ・話し手に対して親身になれる 	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な考えに出会う機会が少ない ・教師が児童生徒の発言やつぶやきを把握できない
グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・発表する時の抵抗感が一斉に比べて少ない ・目的に応じて意図的なグループ編成ができる ・複数の意見で検討されるため、ある程度練り上げられた意見が期待できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループの活動の進み方に差が生じる ・自己主張が強い子、学習で常にリードする立場の子がいると、受け身になる児童生徒が出てくる ・教師が一つのグループについていると、他のグループの活動が見えない
一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な考え方に会う機会が増える ・学級全体での練り上げができる ・全員で考え方を共通理解できる ・教師が一斉に関わることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の考え方を表現する機会が減る ・受け身になる児童生徒が多くなる ・発言が苦手な児童生徒にとっては、発言の負担が大きい

○授業中の話し合いには、授業のねらいを達成する以外の効果として、児童生徒同士の助け合いや高め合う人間関係づくりを促進し、学級の親和性を高め、学習意欲を向上させるはたらきもあります。

○ペアやグループなど話し合いの形態を工夫する際に、組む相手をねらいに応じて変更することで、その効果を更にも上げることができます。

【理科の授業におけるねらいに応じたグループ編成の工夫：例】

【問題解決に向けたグループ編成】

- ・理科の授業では、主体的に観察や実験を行い課題を解決するなどの、探究的な学習活動が重視されています。
- ・探究活動の多くの場面で話し合いが行われますが、探究活動前半の児童生徒の発想を丁寧に見取り、探究の方向性が似ている者同士がグループを組むと、話し合いが活性化し、自力での問題解決の可能性が高まります。
- ・その際、問題解決の困難さに応じて、グループの人数を任意に変更することも大切です。

【考えを広げるグループ編成】

- ・理科のねらいの一つに、科学的な思考力・表現力の育成があげられますが、それらを育成する方法の一つとして、自由な発想を生かした話し合い活動が考えられます。
- ・「考えを広げる」ことをねらう場合は、物事を多面的にとらえることが得意な児童生徒を事前に把握しておき、各グループに配置しています。
- ・話し合いを通して、意図的に配置した児童生徒の豊かな発想に触れることは、グループ全員の多様な発想につながります。

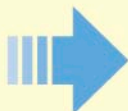
【視点】一人一人の実態に配慮した授業づくり

ポイント

I. 現状の把握

①何ができて何ができないのか

②情報の集約



授業中の様子やノートの点検、プリントの解答状況等から一人一人の授業の理解度を把握しましょう。

児童生徒から話を聞いたり、他の教職員からの情報により学習への意識、学習活動に対する適応、学習習慣等を的確に把握しましょう。

II. 個に応じた対応

①個に応じた課題の設定

②多様な学習課題の提示

③具体的な手立ての工夫

④学習の振り返り



実態把握に基づく課題を意識させ、それに応じた目標をもたせ、授業に臨ませましょう。

多様な学習課題を提示し、学習意欲を高めましょう。

ねらいに達しない児童生徒には、意図的に声をかけるなど、具体的な手立てを工夫対応しましょう。

振り返りシート等を活用し、その時間の自分自身を振り返る場と時間を設けましょう。

III. 不適応の解消

①教職員間の連携

②積極的な働きかけ

③家庭学習を振り返る場の設定



教職員同士の連携を常に図り、教材や課題の設定などの工夫をしましょう。

教育相談を意図的・継続的に実施し、児童生徒に寄り添いながらやる気を持続させましょう。

連絡帳や学級だよりを利用して、家庭と密に連絡を取り合いましょう。

IV. 計画の見直し

①変容の確認

②相手との関わりの状況



現在の方策や設定した目標は適切か、児童生徒の活動の様子や変容から見直しましょう。

他の教職員や保護者との関わりの状況も考慮し、更により計画を作成しましょう。

児童生徒の情報共有(教職員間の連携)〈小・中・高〉

◎全児童生徒の個人カルテを作成し、校内LANで情報の共有を図っています。

担任の教師だけでなく、授業に出る全教師が児童生徒一人一人の実態を早い段階（授業前）に把握することで、興味・関心や習熟度に応じて、授業に臨むことができます。

結果として、学習上の不適応を予防する指導が、組織的に行えるようになります。

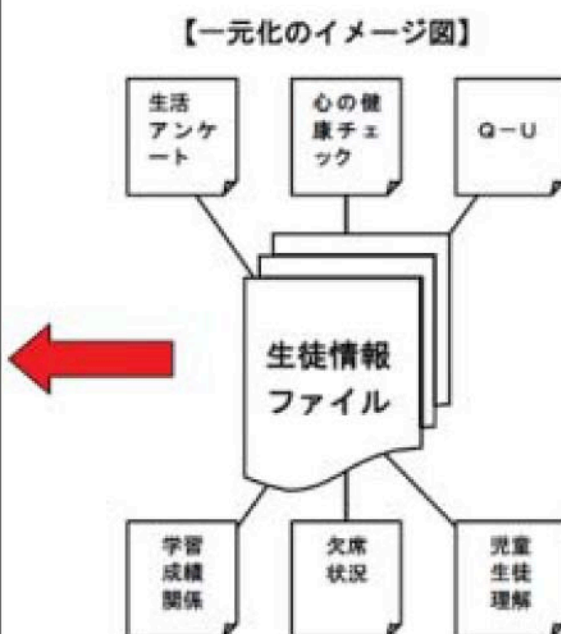
下図参照 [個人カルテ]



例えば、十分な知識を身に付け理解力はあるが、人前で発表することが苦手な子がいたとします。そのことを教師がおさえていれば、挙手していなくても意図的に取り上げ紹介することで、発表のきっかけや自信をもたせることができます。

個人カルテ

氏名	★★★★	住所	★★★★★★★★	★★★★小学校出身																																																												
生活アンケート結果																																																																
4月 5月 6月	心の健康チェックテスト結果(ストレス度)																																																															
学級適応感・意欲等調査																																																																
生徒理解チェック		<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td>1学期</td> <td>2学期</td> <td>3学期</td> <td>平均</td> </tr> <tr> <td colspan="4" style="text-align: center;">学習成績関係</td> </tr> </table>			1学期	2学期	3学期	平均	学習成績関係																																																							
1学期	2学期	3学期	平均																																																													
学習成績関係																																																																
部活動記録																																																																
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td>欠席状況</td> <td>小学1年</td> <td>小学2年</td> <td>小学3年</td> <td>小学4年</td> <td>小学5年</td> <td>小学6年</td> <td>中学1年</td> <td>中学2年</td> <td>中学3年</td> </tr> <tr> <td>欠席</td> <td>4月</td> <td>5月</td> <td>6月</td> <td>7月</td> <td>...</td> <td>合計</td> <td colspan="3">欠席理由</td> </tr> <tr> <td>遅刻</td> <td colspan="9"></td> </tr> <tr> <td>早退</td> <td colspan="9"></td> </tr> <tr> <td>保健室</td> <td colspan="9"></td> </tr> <tr> <td>家庭訪問</td> <td colspan="9"></td> </tr> </table>					欠席状況	小学1年	小学2年	小学3年	小学4年	小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	欠席	4月	5月	6月	7月	...	合計	欠席理由			遅刻										早退										保健室										家庭訪問									
欠席状況	小学1年	小学2年	小学3年	小学4年	小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年																																																							
欠席	4月	5月	6月	7月	...	合計	欠席理由																																																									
遅刻																																																																
早退																																																																
保健室																																																																
家庭訪問																																																																



一人一人の実態に配慮した授業を行うためには、児童生徒を多角的・多面的に見取り、教職員間で情報の共有化を図ることが大切です。指導上の参考になる情報を「生徒情報ファイル」に入力し、その情報をすべて関係付けて閲覧できる「個人カルテ」によって、一元化を図っています。上記のものは、全てセキュリティが管理されたファイルサーバー上で処理されています。

授業研究〈小・中〉

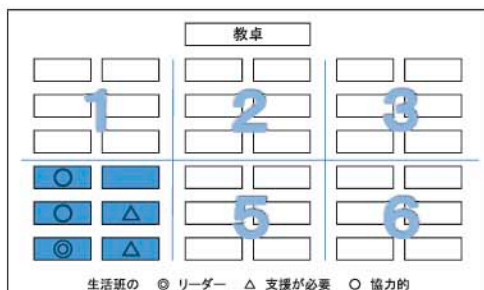
◎児童生徒一人一人と学級集団の状態に応じ、授業の構成を工夫したり、学習形態や座席を決めたりしています。



個人や学級集団の状態を把握した上で、授業の構成（指示の仕方・到達レベル・班編成・時間配分等）を工夫しています。

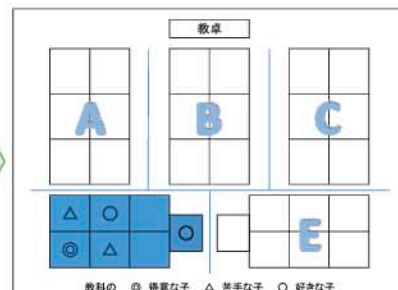
また、学習指導部が作成した共通の振り返りシートを活用し、次時の見直し（具体的な手立てや課題設定の変更等）を行っています。

【生活班を基盤とした配置例】



児童生徒一人一人が、安心して授業に取り組めるように配慮しています。
学習形態・座席は、授業づくりの要の一つであると考えています。

【学習班を考慮した配置例】



学習形態や座席は、学級集団の状態（まとまりがあるか、ばらばらか等）や個人と学級集団との関係性（認められているか、疎外されているか等）を見取った上で、教師が意図的に決めていくことが、学習効果を高めます。

担任だけでなく、教科担任が特別教室でもこのような配慮を行ったことにより、不適応（登校渋り）や問題行動（授業離脱）を未然に防げた例もあります。



あなたは、学業指導を知っていますか！

学業指導は、学習指導のねらいを達成するための基盤をつくっていくことです。

平成21年1月
新潟県教育委員会



“集団の中で学ぶ”という学校教育の特質を生かして、子どもたち一人一人を成長させるという視点が大切です。
学業指導とは、それぞれの学級を「学びに向かう集団」に高めながら、児童生徒一人一人が自らの力で様々な不適応を解消し、意欲的に学習活動に取り組みめるように指導・援助していくことにほかなりません。

I 学びに向かう集団づくりのために

どのような集団に属しているかで、子どもの成長は大きく異なります。一人一人の向上のためには、個への指導・援助とともに、属する学級を、互いに高め合うことができる「学びに向かう集団」につくり上げていくことが重要です。

そのため、以下の三つの視点到意した学級づくりに取り組みましょう。

1 帰属意識の高い学級づくり

- 一人一人が周囲から認められていると感じる活動場面を工夫する。
- 協力して一つのことに取り組みるように工夫する。
- できるだけ子どもたちの発想に基づく活動を取り入れる。
- 心からの感動体験を意図的に創出する。

2 規範意識の高い学級づくり

- 学校・学級で守るべきルールを明確にする。
- 集団にはルールが不可欠であることを体験とおして学ばせる。
- 子どもたちが自ら約束を決め、協力して実行できるように工夫する。

3 互いに高め合える学級づくり

- 全員が参加して学級の目標を設定する。
- 学級のために自分は何ができるか、自ら考えるように指導を工夫する。
- 当番や係活動の活性化を図る。
- 互いに夢や目標を語り合う場や機会を設定する。

互いの関連を図りながら、指導を充実させていくことが大切です。

II 子どもが意欲的に取り組む授業づくりのために

教師にとっても大切なことは、何といっても日々の授業の改善です。授業をとおして、教科のねらいの定着を図るためには、児童生徒一人一人が学習活動に自主的かつ意欲的に取り組みめるように、指導・援助する必要があります。

そのために、以下の三つの視点到意した授業を実践していきましょう。

1 自信をもたせる授業

- 認める・ほめる・励ます機会を意図的に設定する。
- 最後までやり遂げた結果として成功体験が積めるように指導を工夫する。
- 時には思いどおりにならない体験をさせる。
- 自分で選択・決定する場面を発達段階に応じて設定する。

2 コミュニケーション能力をはぐくむ授業

- 相手の話を聞いたり自分の言葉で伝えたりする活動を取り入れる。
- 協力し合う場面を設定する。
- 子ども同士が教え合う活動を意図的に設定する。
- 自己理解、他者理解を促すために、自己評価・他者評価を活用する。

3 一人一人の実態に配慮した授業

- 毎日、授業や家庭生活を振り返る場や時間を設ける。
- 教育相談を意図的・継続的に実施する。
- 学習不応答の解消に向けた組織的な指導・援助体制を整える。

各学校において、あらゆる教育活動をとおして学業指導の充実に取り組みしましょう

学業指導の充実に向けた取組を振り返ってみましょう

このチェックシートには、本県の全ての教職員に、自分の学年や学級で必ず取り組んでほしい内容を項目として示しました。

学びに向かう集団づくり

1 帰属意識の高い学級づくり

- 子どもたちが協力して取り組めるように活動を工夫している。
- 一人一人が、個性や能力に応じた役割を担えるように工夫している。
- 行事等に企画段階から子どもたちがかわかれるように工夫している。
- 他の学級、学年など、いろいろな集団との交流の場を設定している。
- 子どもたちと感動を共有できるように心がけている。

2 規範意識の高い学級づくり

- 学年、学級で守るべきルールを具体的に定めている。
- 教職員間の共通理解のもと、ふれないう指導を実践している。
- 子どもたち自身に学級の約束を決めさせている。
- 時と場に応じた行動がとれるように指導を工夫している。
- 日々の生活や行動を講義に振り返る時間や場を設けている。

3 互いに高め合える学級づくり

- 学級の目標を子どもたちと一緒につづいている。
- 将来どんな生き方をしたいかを互いに話し合う機会を設けている。
- 競い合う場面や助け合う場面を意図的に設定している。
- 当番活動や係活動を活用した学級経営をしている。

子どもが意欲的に取り組む授業づくり

1 自信をもたせる授業

- 一人一人が活躍できる場を意図的に設けている。
- 子どもものよいところを認めたり、ほめたり、励ましたりしている。
- 一人一人の実態に応じ、指導計画を明確にしている。
- 児童生徒が自ら選択できるように、多様な学習方法を用意している。

2 コミュニケーション能力をはぐくむ授業

- 友人の発表をしっかりと聞けるように指導を工夫している。
- 自分の考えをまとめ、発表できるように指導を工夫している。
- 考える、互いに教え合う、指導する場面をバランスよく設定している。
- 小集団活動を取り入れ、子ども同士のコミュニケーションを促している。
- 自己評価、他者評価を生かした授業を実践している。

3 一人一人の実態に配慮した授業

- 日記、作文などをとおして、自分の心を表現する指導を行っている。
- 実態調査、教育相談などをとおして、学習不応答の把握に努めている。
- 学習不応答の解決に、教職員が協力して組織的に取り組んでいる。

6.平成23年度児童・生徒指導推進委員会委員

	氏 名	所属・役職等	備 考
1	河 村 茂 雄	早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授	委員長
2	大 場 賢 治	河内教育事務所指導主事	委 員
3	福 田 誉	上都賀教育事務所指導主事	〃
4	市 村 政 幸	芳賀教育事務所副主幹	〃
5	海老沼 功	下都賀教育事務所副主幹	〃
6	築 瀬 のり子	塩谷南那須教育事務所副主幹	〃
7	郡 司 祥 久	那須教育事務所指導主事	〃
8	亀 田 哲 夫	安足教育事務所副主幹	〃
9	君 島 孝 典	学校教育課小中学校教育担当副主幹	〃
10	石 嶋 幸 夫	〃 高等学校教育担当副主幹	〃
11	高 橋 哲 也	〃 児童生徒指導推進室室長	事務局
12	柳 田 伸 二	〃 副主幹	〃
13	伊 澤 雅 幸	〃 副主幹	〃
14	小 倉 克 則	〃 副主幹	〃

7. これまでの主な指導資料

- 児童生徒指導の指針「心豊かな栃木の子どもを育てるために」（平成12年9月）
- 「児童・生徒指導に関する危機管理マニュアル作成資料」（平成14年2月）
- 児童・生徒指導資料「児童・生徒指導の充実を目指して」（平成15年11月）
- 「『いじめ』の理解と対応」－いじめのない学校を目指して－（平成19年9月）
- 「生徒一人一人の適応感を高めるために」
 - －中途退学の未然防止に向けた中学校・高等学校の取組－（平成23年3月）
- 児童・生徒指導推進委員会協議のまとめ
 - ・平成14年度「不登校の解消に向けた方策について」（平成14年10月）
 - ・平成15年度「暴力行為を予防するための方策について」（平成15年10月）
 - ・平成16年度「場に応じた適切な判断力を育てるための指導・援助の在り方」
 - －加害者にも被害者にもさせないために－（平成16年10月）
 - ・平成17年度「望ましい人間関係を構築する能力を育成するための指導・援助の在り方」（平成18年3月）
 - ・平成18・19年度「学校に求められるこれからの児童・生徒指導」
 - －児童・生徒指導が機能する学校体制づくり－（平成20年3月）
 - ・平成20・21年度「学校に求められるこれからの児童・生徒指導」
 - －発達課題の視点から見た児童・生徒指導の評価について－（平成22年3月）

8. 参考文献

- 「生徒指導提要」文部科学省、2010
- 河村茂雄、品田笑子、藤村一夫編著「いま子どもたちに育てたい 学級ソーシャルスキルCSS－小学校低学年」図書文化、2007
- 河村茂雄、品田笑子、藤村一夫編著「いま子どもたちに育てたい 学級ソーシャルスキルCSS－小学校中学年」図書文化、2007
- 河村茂雄編「図でわかる教職スキルアップ2 集団を育てる学級づくり12か月」図書文化、2006
- 河村茂雄、粕谷貴志編「授業スキル 学級集団に応じる授業の構成と展開 中学校編」図書文化、2004
- 有村久春編「“教職研修”スタートブックvol1 “学級づくり”スタートブック」教育開発研究所、2003
- 國分康孝監修「エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集」図書文化、1999
- 國分康孝監修「エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集Part2」図書文化、2001
- 「通うのが楽しい学級づくり」福井県教育委員会、2009
- 「中1ギャップ解消に向けて」新潟県教育委員会、2007
- 生徒指導の機能を生かした授業づくりの手引き「授業が変わる 生徒が輝く 中学校」岩手県総合教育センター、2005

平成23年度 児童・生徒指導推進委員会協議のまとめ

「学業指導の充実に向けて」

－学業指導を全ての教職員が進めるために－

平成24年3月発行

〒320-8501 栃木県宇都宮市埜田1-1-20

栃木県教育委員会事務局学校教育課児童生徒指導推進室

TEL 028-623-3359

FAX 028-623-3399

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/m04/education/gakkoukyouiku/seitoshidou/1182421286322.html>

【ホーム>教育・文化>学校教育>児童・生徒指導>児童生徒指導推進室>児童・生徒指導に関する基本資料】
